
恋姫？ハイハイ、童貞乙

ミケネコ三号

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋姫？ハイハイ、童貞乙

【Zコード】

N1187BA

【作者名】

ミケネコ三号

【あらすじ】

「へーーー！みんな、白仲だお。

みんなはトラックに轢かれたことはあるかな？

ミンチになつた俺は、三国志に来た世界に來たけど、時はまさこ廿紀末。

モヒカンAとしてがんばつております。老後のためにバリバリとお金稼ぐぞ。

ところがだ、何故か降りかかる死亡フラグの山。いや、ねーよ。恋

愛フラグもねーよ。
あと一刀は氏ね。

プロローグ・将来の夢『長生き』

いわゆる、無理ゲーである。

後漢における靈帝の治世。その状況は最悪であった。

外においては、鮮卑族。

檀石槐というチート極まりない指導者が生まれた。またたく間に、匈奴、烏丸などの他の部族たちを打倒し、その領土を奪いまたたく間にモンゴル高原を統一。

さらに、法を制定して、自國の治安を安定させ、超巨大国家を生み出す。わかりやすく言えば、チンギス・ハーンと同じ大きさの勢力ができたと考えればいいだろ？

……そして、

『ああ、ワイらのことを下に見る漢王朝が気に入らんのじゃあ、どつちが上か下かはつきりしたろやああああ！』

『オジキかっこいいです』

『テメヒら、漢王朝をボコりにすつぞーーー死ねやおんぢりやあああああ』

と、気に食わんという理由で漢への略奪を開始。

理由が理由だけに和睦交渉に応じる気持ちゼロ。そんなチート鮮卑族を前に漢王朝の将たちは完膚なきまでに叩き潰され、本当にどうしようもない状況だつた。

ゆえに、防衛戦の戦費を下げるわけにはいかない。莫大なお金を払

いながら血を吐きながら走るマラソンタイム、スタートだった。

内においては、権力争い。

清流派、外戚、宦官がくつついたり離れたりしながら、それぞれ国の権力を得て富を得ようとしていた。

……と。いうのは有名だが、そんな事は実は些細なコトである。党錮の禁や宦官の悪政、そんな事より切実な問題があった。どうじよつもない問題があつたのだ！！

政治が何だとか、いう以前に。

『金がない！！政治を行えるだけの金がない』

朕が使つたから無くなつたんではない、もともと、無かつたんだ！
！先代がばらまいて本当に無いんだ。そのうえ檜石塊とかマジでフザケルな。

むしろ靈帝はお金を貯めて、ちゃんと国庫に補充していたのだ。官職を売買したせいで、賄賂が増えたとかいうが。

後漢王朝はずつと前から賄賂まみれだ！いや、むしろ。

『賄賂で昇進するんだつたら、その賄賂が自分の手元に入つてくれ

『ばいいじやない』

と、皇帝が官売をしたことで、賄賂は減ったのだ。

官売をして賄賂が増えるなんて物理的にありえんのだ、相変わらず最悪で最低だけど。

靈帝は凡才だが、凡才は凡才なりに色々と考えていた。

そんな私の気持ちを、一体誰がわかつてくれるのだろうか

＾＾プロローグ・将来の夢『長生き』　＾＾

思えば靈帝も哀れな男だ。

「10代で謎のトラックに惹かれて死んだ私とびっちが下なのかな
あ」

歩道を歩いていた。

子供のころから母親に『歩道を歩かないと車にひかれるよ』と何度も注意されていたから、車に注意ながら。

そんな私のところに、いきなり猛スピードで道路交通法を無視して歩道を突っ走つしてくるトラック。

「危な！…だが、なめるな…！」

私はとつさの判断で、路沿いの田園に飛び込み。かのトラックを交わす。

ほっと、一息はき、泥まみれの体を見て、全く危ない」ともあるんだと愚痴りうと思つた時

「ちょっと、なんで、バックして…正直ないわー」

なんか恨みでもあるのか、ただの学生に…！
グチャリいう嫌な音と嫌な感覚、一度と味わいたくなく思い出したくないあの感覚。

まあ、そんな感じで私の短い人生は終わりを告げた。

告げたはずなのだが。

「輪廻転生……」

古代中国。

おそらく後漢末期、靈帝の時代。真名や紙の普及、異様な服装など違つてもある、中国史マニアからしてみれば突込みどころ満載だ。

とは言つものの、私みたいな人間がこの世界へと転生していたと考えるなら説明がつく。

自分みたいな人間がこの世界に転生して文化文明を発達させていると考えるなら、この時代の奇妙さも不思議ではない。

そんな、とある時代と似たこの世界に転生して一度目の人生を送っている。

「なに、たそがれてんつすか、ボロ」

中国の東、日本海側に位置する徐州北部のとある町。

古ぼけた本を片手に野原に腰掛け、ぼんやりと雲の流れる空見つめる。そんなボケーっとしようもないことを考えていた俺に小柄な男が声をかけた。

彼は仲間内ではチビと呼ばれている。本名は知らない、真名と呼ばれる親しいものに教えると名前も知らない。

盗賊家業を行うでは人の過去や名前については詮索するのはタブー

だ、聞くのは現金。女性の名前ならともかく、男の名前なんか聞くたくもないけど。

ちなみに俺がボロと呼ばれているのは、なんか霸氣が無く、貧乏臭く、ボロボロに見えるから。

「あ、あの時のことを思い出しているんだな」

そう言つたのは、肉の塊。デブと言われる盜賊仲間の一人だ。

「ああ、あの女性三人組のことですか」

「そ、そうだな。あの女性たちに槍を向けられて。

ガタガタ震えながら涙を流しながら、うんこ漏らしたことで

「あの時は仕方なかつたんだ。それでもしないと首にお繩がかかつていただろ！！

昔々、天下を統一したエライ人がやつた、焼き味噌作戦を馬鹿にしないでよ

つうより、一仕事終えてお金があるのにちよつかい出したのはあんたたちでしょ」

「いやいや、悪かったですよ。ボロ」

「いや、そこまではなくても」

チビが悪いと頭を下げた。

いや、なんつーか、かわいらしい三人の美少女の前で漏らす。

……なんか、気持ち良くない?って思つたし。

……。

……変態じやないよね、自分。

股間がキュンとしたけど、変態じやないよね。

ほら、女性に蔑まれる視線つてエクスターを感じないか、感じる
だろ？。感じるはずだ。

そんなことはないと思つた偽善者ども！！

エロゲーやエロマンガで、一度でもそんなショチエーシヨンはなか
つたと言えるのか（この時代にはエロゲーはないが）！！俺は何度
もあるぞ、何度も！！

それでも、ないつていうやつは哀れな奴だよ、バーロー。

幸福を得る手段が一つ他人より少ないってことだからなあ！！悔し
かつたら蔑まれた視線でエクスターを感じて見せろ！！

……ふう。

「ソレより兄貴はどこにいたんです、泰山近くの墓場荒らしで見つけた書物についての話が」

太平要術の書、社をぶち壊したら見つかって怪しげな本の名前だ。三国志演技で黃巾党の張角が持っていた書物だつたつけ？古い字で書かれているので、詳しく解読ができなかつたが内容がやばいことだけは確実。

嫌な予感がするので燃やすように言つておかなければ。

「た、旅芸人のところだな」

まったく、好きだな。また出費がでかくなるよ。この盗賊団の財政を担当している身としては、リーダーの旅芸人好きは諫めないと云ひきかも。

「それより、また本をよんでいるんだな」

「孫子や儒教の教えを覚えなければ、群雄の人材が少ない時に拾つてもらつて下級文官として過ごすことができません。」

漢文の読み書きをマスターした程度じゃあ、就職には程遠いですね」

「また、天下は分断されると言つているんスカ、

漢王朝の治世は悪いのはわかるつすけど」

「いや、手遅れでしょ」

手遅れだ、どいつもこいつもクズばかり。

皇帝や宦官が悪いというが、全部嘘。清流とか真っ当な豪族と言われる奴にひどい目にあつた元奴隸の立場から言わせてもらうとね。

そもそも、清流派と言われる豪族が持っている莊園や奴隸をすべて開放し、ちゃんと税を納めるようにすれば国家財政は確実に好転するのだ。

他人を濁流と見下して聖人面する『そんなこと』もできない人間が、『宦官を殺して我々に政治を任せれば事態は好転しますよ』なんて片腹が痛い。

「つひても」

菅子曰く『衣食足りて、礼節知る』だつたつけ？

現代でしつかり情操教育を受けた私も、元の世界の『人は殺してはいけないですよ』な倫理観などすでに剥ぎ取られ盜賊活動。他人をバカにできるような人間から墮ちていっているのさ、『何が国だよクンニしろよ！』的な？

そーんな、私のように状況に流されるクズが下にも腐るほどいるしね。

「しょうもないなあ、自分自身すら」

ただし、しょうもない人生を送っていても黄巾党だけには入らないようにしないと。

元の世界で、官軍たちにフルボッタにされる組織に入るのはリスクが大きすぎる、巻き込まれて死ぬなんてゴメンだ。

死ぬつていうのは死ぬほど苦しい、できるなら一度と味わいたくない。生きている以上、もう一度死ぬことだけは確実なんだけどさ、長生きはしたいやん。

みんなに内緒でコツコツと貯めてきたお金もあるし、黄巾の乱に巻

き込まれないよつて身を離す」などができるはず。

北の泰山には兄弟な勢力を持つ大盗賊の臧霸、盗品を高値で買つてくれる商人の魯肅など元の世界でも活躍した奴らとも知り合いになつたし、

アイツらのところで囮つても、彼らのもありかな？

「 そういうや、何故か元の世界とは違い、女性だつたな、二人共、しかも、すつげー美少女。うん、美しい少女だよ、美少女だつたけどお近づきにはなりたくない性格。」

ううん、惜しかった。

元いた年齢と今生きてきた年齢。

プラスすると30歳超える！

2度目の人生の年齢はよくわからんが、女性経験は一度もないのは確か。

童貞

すなわち、30歳童貞＝魔法使い。

あああああ！！！

そういうや、母親以外の女性と手をつないだこともないお。

そんな事を考えていると、我が盗賊団（4人しかいないが）のリーダーが駆け足でやってきた。

「あ、兄貴が帰ってきたんだな」

「ハハハ、どうで…、どうしたのでしょうかね」

「さ、決めたぞ！！！」

天和地和人和の役満シスターズの親衛隊を作る！！

あと、太平要術の書だつたか？お近づきの印としてくれておいたぜ

第一話・うわああああああああ！！

北郷一刀がボロ……こと白仲黒霸と知り合ったのは貧民街のこと
でだ。

聖フランチエスカ学園に所属するごく普通の少年であつた彼は、ある日突然、古代中国に飛ばされた。

何が何だか分からず草原で茫然と立つ一刀。

運よく善意に満ちた人間に拾つてもらえることもなく、食べるももなく空腹に倒れていたところを小悪党に見つかり、身ぐるみをはぎ取られ、奴隸として一束三文で売り出される」とになつた。

だが、もともと一刀はバイタリティと人間関係構築スキルの高い。同じように売られようとする人々を仲間にし、隙を見て小悪党たちに反乱を起こして逃げ出すことに成功する。

ひとまずは自由との世界で生きるために覚悟を身に付けた一刀。

だからと言つて職もなく、家族もなく、異世界から来たと言つても信じる人もない。

未来知識もまったく意味をなさなかつた、じつじつとなら学校でもつと漢文の勉強をしておくべきだつたと後悔した。いつの間にか過去のことを語ることもなくなり、貧民街で「アリあさり」をしながらその日暮らしの生活を行つよになつていつた。

ボロボロな衣服を身にまとい、何時ものように「アリアリ」をあさつて、一人の少年が話しかけてきた。

第一印象は、貧弱。

まだ若いのに、リストラ寸前の成績の上がらないサラリーマンのよくな覇氣のない姿。

自分より、2、3歳ほど年下のようだが、まるで駄目なおっさんにしか見えない情けなさ、何があつたかわからんが自殺寸前のようなダメさ。

一刀自身、まともな生活を送つてゐるとは思えないがじつよりはマシだと思った。

「なんだ? この人は」

ひとまず、服の中の賊から奪い取つた短刀の重さに意識を向けつつ、彼の話を聞くことにした。

『ボクと契約して、黄巾党になつてよ』

…………、やっぱり嫌な予感は当たつていたよな。

土下座や泣き落としによって、いつの間にか黄巾党、徐州支部に入ることになった、一刀。

そこで初めて、張角たちが天和、地和、人和という美少女であり、役満シスターZという歌つて踊るアイドルであることを知る。もともと樂天的に物事を考える一刀は『さすがに戦争が起きることはないよな、大丈夫かもしれない』と、黄巾党の中でもじめに仕事を取り組んだ。

一方、白仲は黄巾党に入ることを渋つた一刀を気に入つた。やつと、まともな判断ができる人間と出会つたと、知り合いが全員アイドルオタクというのは、精神的孤立が激しいのだ。

徐州支部？4の白仲の目にかけられたことや、もともと人付き合いの上手いこともあり、まだ小規模であつた徐州黄巾党の幹部になる。だが、この種馬がまつとうな人生を送るわけがない。ファンも増えだし、悪質なファンも多くなってきた頃のことだ。ライブの前に質の悪いファンに絡まれていた張三姉妹を助け。

「一刀をマネージャーにします」

「感謝しなさいよね」

「マネージャーがちょうど欲しかったことですし」

と、フラグを3つも立てて黄巾党本体のいる冀州に向かうことになつた。

その時、何かをあきらめたかのように白仲が一刀を見ていたのを誰も気づくことはなかった。

「一刀！！大丈夫？」

刃物で切り裂かれた肩から赤い血を流す、一刀。その苦痛に満ちた様子を見て、地和が声をかける。

いつも自分に悪態をつく彼女の泣き顔を見て、思わず苦笑した。

「あはは、これくらい大丈夫。
傷は浅い。すぐに血は止まるって」

痛みをまざりわるかのよつに、馬車の馬に鞭を当てる。

「すみません、強硬手段に出るなんて」

いつも冷静な人和が顔をまつさおにし、平静を失っている。

「うん、みんな嫌な目で私たちを見つめていた」

太陽のように明るい笑顔を絶やさない天和が暗い顔をして視線を下に向けた。

黄巾党は大きくなりすぎた。

役満シスターズはまぎれもなく光だつた。くらい漢王朝を照らす希望。

そんな希望に荒湯津者たちが集まつていつた。

漢王朝に不満を持つもの、人生のすべてが嫌になつたもの、大事な人を殺されたもの、そんな負の感情を持つた人間たちが闇の中の光に群がるガのように集まつた。

だから、黄巾党は大きくなつた。そして、大きくなりすぎた。

怨念にまみれた超巨大な爆薬、ソレが現状の黄巾党だ。

そして、そのきな臭さを嗅ぎつけ、役満シスターズの影響力を利用しようとする者たち現れ始めた。

『今の黄巾党は危険過ぎだ、この状況！――早く何とかしないと』
一刀は独自に信頼できる仲間を集め始めた。状況を開拓するために。だが、遅すぎた。その動きを彼女たちを傀儡として扱おうとする者たちに気づかれてしまう。

彼らは三姉妹を無理にでも拘束して手中に收めようとする強硬手段にでた。間一髪、一刀は仲間と共に剣を片手にその包囲を突破する。その代償は大きく肩を件で大きくえぐられ、仲間たちも何人も失つてしまつた。

だが、悔やんでいる時間なんて無い。無理矢理にでも逃げ出すことに成功したんだ、後は何処に行くかだ。

「そんなもの、一つしか無いな。みんな、徐州に行こう」

「…徐州？」

「ああ。アニキもチビもテクも、そして黒霸さんも力を貸してくれ
る。大丈夫だ」

元盗賊で武闘派のアニキ達は重度のシスター・ズファンだし、
黒霸さんは前世とか興味あるつて変なことよく聞く人だけど、頭が
いい人だからきっと。きっと大丈夫

一刀よ、成仏しろよ。

おそらくこれから死ぬであろう友人のことを頭に浮かべた。

「何を考えているんだい？」

まあ、キミのことだから、小さい小さい事なんだろうがね

小柄な体を黒いマントに身を包み、背には腰まで届く三つ編みを垂らしていた。

白い肌をした儘い印象を与える間違いなく美少女…、なのだがやけに服装からして怪しく不気味であり、不敵な顔つきをしている彼女は胡散臭く感じる。

「相変わらず気持ち悪い言い方をするなあ、魯肅」

黄巾党、徐州支部の一室で、白仲はため息を吐いた。

徐州支部は黄巾党の端っこに位置するが、交通の便がよく南方の役満シスターーズファンの集まる場所である。

白仲は孤児や流民などに声をかけ、ステージの清掃や役満シスターーズグッズの作成、ライブ装置の作成など。ファンたちの過ごしやすい環境を作り地道に集客力を上げ、黄巾党の中でも力を持つグループの一つとして成り立たせた。。

「女性に対して気持ち悪いとは何事だね、

それにくわえ、女性を前に他の人のこと考えるのは失礼なのでは

「はいはい、悪づけました」

白仲の前にいる人間は魯肅子敬、盜賊時代からのお抱え商人の一人だ。

豪商に生まれたのに、怪しげな賊と商売をする。まともな神経じゃないやつ。周りからは狂児と言われ変態扱いされている。

「では、本題に入らう。
念を押すようだけど、黄巾党が乱を起こすのは今年中だといつのは確実？」

「まね。黄巾党本隊のある冀州が豊作になるそうだから確実でしょ。
農民の一揆なら不作の時に戦う、『ごはんを食べるため、生きるために』だ。

…が、コレは一揆じゃない。黄巾党という軸を主体とした、『戦争』だ。

『戦争』なら最低でも食料と武器を準備して確実に勝つために動く、すなわち自分が有利に動ける『今年』

「ふむ、理にかなっているね。

約束の食料は準備しておくよ、まあ武器の輸送は難しいが

「武器の方は臧霸に当たつている、問題はない」

新品ではないが、武器はもらえる約束であった。
すでに、アニキたちを『強くなきや親衛隊はダメでしょ』とのせて、訓練を積ませた部隊は十分に揃っている。
本当にバカで行動力のある人つて扱いやすいな。

「ふふつ、ずいぶんとやる気だね。

漢王朝に喧嘩でも売るつもりかい」

「何だよ、人を過大評価しないでくれ。

自分が助かるために最善手を尽くしているだけだ、黄巾党や漢王朝がどうないうと知ったことじやないな」

「ふむ、つまらない」

白仲は思った。戦争のため、生きる準備はして置かなければならぬ。

たとえ黄巾本隊が滅びるとしても、自分たちは生き残り、軍事力を得ようと/or>する何処ぞやの群雄に降伏するため。

そして。

一刀悪い！！！マジで成仏してくれ、巻き込まれて死ぬことになるけど、恨まないで。ゴメンよ。

本当に「めんなさい！！！蓬萊（日本）出身ついことで同郷で仲良くなれそうだったから上層幹部に推挙して悪い、うわあああああ。

でも、アイドルになんて興味無いので、役満シスターズと心中なんてゴメンなんだよ！！

一人で死んでおくれ。

ほら美人アイドルグループのマネージャーになつてパイタッチした
んだろう！！

そこまでいこ思つしたら、きっと満足して死ねるはずだ。

うん、
満足。

「一ノ、黒覇さん」

そんな、ことを考へてゐる田舎の耳に聞き覚えのある声が聞こえた。
あれ？ 幻聴？ はい幻聴ですよねー。 徐州でのライブ予定はなかつた
筈ですよー。 なんで、聞こえるだろ？

「助けてください」

オウ、ナゼ!、一刀サンの声がギョエルンデス!?
ワターチ、日本語わかりません。ここ中国です。ウソダダンドゴド
!ン!!

「…はつ、罪悪感か、罪悪感が幻聴を
罪の意識一輪廻の果てに悔いを」

「おいおい、現実を見給え」

魯肅が靈視なツッコミを入れる、目の前には方に包帯を巻きつけた一刀。

そして、その後ろには憔悴した巨乳の天和、貧乳の地和、普通の人和のアイドル三姉妹。えっと、WAY?

「………… プツ、クスクスクス（笑）頑張れよ」

魯肅が指をさして爆笑していた。

いが始まります

うん、わかつっていたわ。と頭を捻り。

「おいしいな、この肉まん。おかわり頬むぞ、黒覇」

「わたしも一つ」

「いや、なんで魯肅、おまえがここにいる」

白仲は魯肅にツツ「ミを入れた。まあ、オレをあざ笑うためだろ。しかし、どうする。どうすれば、どうしてこんなことに……。三姉妹と徐州市部の幹部、そして一刀の会議を尻目にひとり悩みぬく白仲を興味深そうに魯肅は眺めていた。

ああ、どうすれば。

歴史では朝廷は黄巾党を滅ぼす。更に、現状で戦力といえるのは徐州支部だけなら論ずるまでもムダ。勝てない、勝てないな。

かと言つて、死にたくない。いちど死んだ身だからこそ言える、あれは嫌だ。絶対に嫌だ。

肉や内臓が潰れミンチになる感覚はもちろんのこと、そこから先にある、自分が溶け出し消えていく精神の消失。あの恐怖は今でも夢に見る。

「黒覇さん、朝廷との戦いをどうすればいいと想つ」

一人、会議中に何一つ声を出さずに黙りこむ、白仲へ一刀が声をか

ける。

会議が一向に進まず焦燥する一刀の顔を見て思った。なんで売女のためにオレが命をかけなければならないんだ！！

こいつら全員、黄巾党たちは全て滅んでしまえばいい。そう、自分以外の者は死んでしまえば。

死んでしまえば？

そつか、そうだ。

「先に言つ、朝廷とやりあつて勝てるわけがない」

「なつ、ボロ。テメエ」

白仲の叫び声に、一瞬、何を言つているんだコイツと蔑んだ視線が集まる。魯肅を覗いては、だが。

「だが、手は『ある』」

不遜な言葉に、古い付き合いであるアーチキたちは『久しづりか』と心中でため息を吐いた。、

「すまないが、朝廷に三姉妹のファンはいますか」

「宦官の十常時に一人いるつていう情報が入っている」

「十常時といえば皇帝直属に近い存在、これなら。」

「魯肅、時間を稼がせることは可能か」

魯肅はクスクスと笑い。

「さて、時間を稼いで一体何をするのか？」

うん、『西方の五湖などの異民族が不穏な動きをしてくる』とでも話させれば時間は稼げるよ、

乱が本格的に起これば異民族はからず来る『この言葉』は嘘にはならない。むしろ功績として認められるんじゃないかな?』

「ああ、わかった。仲間に頼んで使者を送つてもうつ」

一刀がすばやく誰を繋ぎにするか頭に浮かべる。

脱出経路の一つを確保するため、中央の人間連絡をとりあつていた。それを元にして考えれば、人選は絞れるはずだ。

「そして、アーキー早ければ早いほうがいい、兵を動かせますか」

「ああ、もちろんだ。って、宦軍と戦うのか」

血が騒ぐといった様子でアーキーが席を立つ。もともと盗賊。宦軍との戦いは一度や一度ではない。やつてやるぜと不敵な笑みを掲げる。

しかし、白仲は冷たい言葉を口から放つた

「いや、狙いは『黄巾党』です」

その発言に会議中の人が息を呑む。

「朝廷と戦つても勝てませんからね、
義勇兵という立場で勝てる黄巾党と戦います！」

「ちよつ、ちよつと待つてよ、ちー達は黄巾党のリーダーで

地和は困惑しながら口を開く。

「黄巾党の暴走はひどくなるでしょう。農民たちを巻き込み、実態
がわからないほどのものに。
だから先んじて黄巾党を攻撃して十分な戦果をとえる必要があります。
たとえ、真実の情報が流れても『ああ、情報が錯綜していたんだ！
役満シスターZが漢王朝の敵だなんてありえない』と、こんな感じ
になるようにな」

嘘でも信じ続ければ、真実に見える。

成功するかは実績次第だけど、ソレについては問題はないだろ？
なぜなら。

「クスクス、えげつないなあ。

鋤や鎌が武器の農民達相手でも、十分に兵器で武装し訓練をした自分たちに勝てるはずもない

そして、同じ黄巾党のメンバーなら一部例外を除き、三姉妹相手には剣は向けれられない、だから、負けるはずがないか。

うん、官軍と戦つの百倍はマシだ！！」

ましてや、自分たち徐州黄巾党の士氣は崇拜する三姉妹の手によつて限界突破。

戦う前から勝負は決まつていいだろ？

「ひとつ聞きたいんだけど、戦うためのいいルートはないか」

「泰山をぐるっと回つて青州方面に突入かな、いやとなれば黄河を盾にすればいいよ。

本隊のある冀州は激戦区になるだろ？から近づきたくはないね」

「やうか

そう言つて、白仲は少し目をつぶると三姉妹に声をかけた。

「この経路にある黄巾党のライブ拠点は幾つありますか」

「えつと、小規模なものが4つ、大規模なものが一つあります。食料などの保管は少ないと思われます」

三姉妹の中で参謀に当たる人和が恐る恐る答へる。

「なら、敵は黄河にでも叩きこんで殺せるだけ殺しましょ？
降伏は認めて構いませんが、味方の数はなるべく増やさないよ？」

徐州支部の兵はざつと800人、一刀が連れてきた三姉妹直属の精銳が100人。

民衆から略奪をしないで戦うと考へるなら、必要となる食料は大量になる。さうに、まともな兵站確保の経験があるものは徐州支部にはいない。

「待つてよ。なんでファンのみんなと戦わないといけないの？」

「もうよー、どうして私達が」

アイドルたちがファンと戦うという現実に、耐えられずに声を上げる。

「愛するアイドルに迷惑をかけることが分かりながら、戦おうとする奴はファンとは言えるはずがねえ！安心してくだせえ、手を汚すのわ俺らですからー。」

「アキ、カツコエエ」

そんな中、突つ込みを入れるアーキ。なんて行動力あふれた言葉なんだ。
よし、もつと言え、ビッヂどもにもつと言え、

「ちょっと、ちー姉さん落ち着いて

「それでも、元はといえば一刀が徐州なんかに来いつて言うから」

一刀を非難しているけど、人のせいにするんじゃねえ。白仲は切れ
かけるが抑える

いや、太平要術の書の件を考えれば責任は彼にもあるんだが。

「それに、女つ氣のないあんた。あんたも結局私たちを利用して…」

女つ氣のない？

女性経験のない？

右手が恋人？

……。

「つるせええええええ、クソビッチ共が！」

童貞で悪いか！童貞だよこんちくしょう！人のせいばつかしゃがつてよー！」

ファンが死なずとも貴様らが死ねば解決すんじゃボケがああああああああああああああああ、さつさと死にやがれボケエええええええええ

あ、人生オワタ。

「へーイー！みんな、白仲だわ。

只今、ボクはかごの中に簾巻きにされているんだぜ。
最初は皮膚に食い込む繩はただ痛いだけだったけど、気持ちよくな
ってきたんだ！

慣れつて怖いね、人間の生体の神祕を見たよ。みんなも数日間簾巻
きにされてみよ、きっと新たな世界に目覚めるはずだ、ウフフフ。

「気持ち悪い笑みを浮かべないでもらいたいな。

一刀が『もし殺すなら自分も死ぬ』と庇いだてをしなかつたら、
首と胴が離れていた身とはいえども心を壊すには早いぞ

「つむ、そだねー魯肅。しかし、何でソレで助かるのか」

「彼女たちが一刀に惚れているからに決まっているだろ？」「

畜生、何故だ！

不公平だぜバツキヤロー！あいつとオレの何処が違うんだ。
白仲が心のなかで涙を流す。

無論、他人を簡単に見捨てるコイツと人のために命をかけられる一

刀どつちがモテるかは言つまでもない。
ただの人間としての器の違いである。

「それに彼は人の心の中に入つてくる所があるからね、
か弱い私は心を覗き込まれるのは死んでもゴメンだけど、気に入
る連中は多いだろう」

「か弱い（笑）」

「……ほう、そうか、うん」

白仲が失礼にも魯肅にを差す。

「兵士の他の事務用の徐州黃巾党たちは行く場所はなくなる。
私の所で養つてやううと思つていたのだ。君のおかげで色々と稼
がせてもらつたのでね、商いの規模が拡大して人材が足らなくなつ
たのでちょうどいい。」

その対価といつてはなんだが。君にちよつとしたお礼でも与えようとしていたが、辞めることにするよ

「ちよつ、マジ、謝るから金くれ」

第一話・内政の仕方がわからん（キリッ）

黄巾の乱は終つた。

もともと、指導者らしい指導者がいなかつたのだろう。

味方同士で争いを繰り返し、足並みが揃わず各個撃破されていった。

この戦いで最も活躍したのは袁紹である。

まとまりのない黄巾は敵将狙いや指揮系統破壊などの戦術はできない、数の多さにモノを言わせてすり潰していくのが最善策。最も、その作戦を行える群雄など現時点では袁紹と袁術しかいかなかつた。

しかし、袁術は孫家に対しても兵力を与え、自身は傍観したため、華麗に美しく大軍団を率いる袁紹には大きく差を開けられる。

少数の兵ながら活躍した者たちがいた。

特に民間からの義勇兵からは2つの勢力が軍を上回る成果を上げた。1つは張三姉妹の率いる軍と。

「反董卓連合かー」

「はい、桃香様。袁紹どのから各地へ檄文が放たれています」

劉備軍である。その功績から青州・平原の太守とされ、その地を治めている。

漢王朝の血を引く彼女は乱れ人が傷つくことを憂い。戦を嫌いながらも、人々の笑顔のためと義勇兵を率いた。何処かの義勇兵とは全く違う。

その純粋さに惹かれる者は多く、彼らと共にその地に善政を敷いていた。

檄文をじつと見つめた劉備は、その柔らかで美しい顔を怒りと悲しみに染め上げていた。

「うん、こんな狼藉を許せるはずがないよ。参加しようつ、愛紗ちゃん」

「しかし、并州の太守、董卓か。活躍を耳に聞いたことはないぞ」

関羽が不思議そうに頭をひねる。

「董卓さんは黄巾党との戦いには参加しませんでしたが、活潑な五湖の牽制のため涼州へ向かつたようです」

孔明は現在入ってきた情報をまとめていった。

まとめた、と言つても、自分たちに入つてくる情報は少ない。わかっているのは、涼州出身のために故郷へ向かい馬家と共に五湖を追い払つたことくらいだ。

本来、間者を使い、情報を収集すべきなのだが、太守になつたとはいえ、自分たちの組織は新興勢力。

彼らを雇う余裕もなく、育てる時間もたりない。

今はまるで、闇の中、彼女たちの頭脳を使いこなせる状況ではなかつた。

そんな中、突如。別の仕事をしていた? 統が部屋に駆け込んできた。

「あわわ、も、申し上げましゅ。張軍から安値で兵糧を売り渡した
いと

「いやはは、ボロボロの人人が『コレを買つてくれないと、借金で自滅するんです』って泣きながら土下座をしていたのだ」

慌ててかけこむ鳳統の後についてきた張飛が笑いながら口を開く。

「ほひ、ソレは良かつたではないか。
コレより魏のための戦に向かうのだ、腹が減つては戦ができぬ。幸先の良いことでないか」

「うん、そうだね」

「やつたのだ」

三人とは異なり、駆け込んできた？統は顔を真つ青にしてふるえ
る。

孔明には、彼女が何故震えていたかが分かつた。

張三姉妹は得体がしれない。

無論、義勇軍として活躍をしたから恐れているわけではない。

北郷一刀と呼ばれる将が10倍近い兵を幾度も破つていつたが、所詮鳥合の衆が相手だ。運と軍事才能があればその活躍も十分にありえる話だ。

むしろ、自分たちと同じく青州の一部の太守になつてしてからの行動が奇妙すぎる。

領地について早々の軍縮、さらには税の一年間の免除、その状態で平原を除く他の郡への影響を伸ばすための巡回行動。

また、警察と呼ばれる市内の治安改善策を始めとした漢の法を無視する数々の政策。

不気味、何を考えているか不可解な行動。その状況で『何故か』、漢という国が文句ひとつ言わない。

そして、まるで狙ったかのような食料の売りだし。

怖い。

……一瞬、上ぎった、恐怖心を忘れるかのように董卓との戦いのことを孔明は頭に浮かべた。

へーイー！みんな、白仲だお。

ちなみに、黄巾党との戦い。ずっと縄に縛られていて何もやつてい
ないぜ。

それにしても一刀はすごいね、『戦いのことを教えて欲しい』って
言つたから、孫子や六韜を読み聞かせてやつたら、すごい活躍。

アイツ天才じやね。

最初の方は策が失敗することも何度かあつたけど、戦略的に優位だ
から力押しで何とかなつたつていうのもあるね。
すぐに失敗点を修正して、無理矢理にでも戦術の腕を磨いていけた
んだ。

地味にスバルタ教育よりもスバルタじやないかなー、失敗すると人
たくさん死ぬし、根が善人な一刀はきつかったと思つぜ。
戦いの後半は無双に近かつたけどさ。

それにもしても、イケメンで天才なんて死ぬべきだよ、全く。

「なにボーとしているんだよ、白仲さん」

いつものように電波を拾つていて白仲に一刀が声をかける。
青州、濟南郡。黄河を挟んで平原郡と向かいあう位置にある青州の
交易の拠点として名高い町だ。

そんな、濟南郡太守の城の一室、白仲に『えられた仕事部屋。

無造作に大量の書巻が机の上だけではなく、地面にまで散らばっている。衛生面で優れたとは言いがたい場所。

「やあ、天才児」

「誰が天才児だ。ソレより食料は」

「なんか、劉備のところは妙に渋つていたけど。鼻水出しながら『コレを買つてもらわないと、北郷様に何と言われるか』嘘泣きました。余裕で売れました。」

「レで今年の給」をみんなに払えるよ」

「ちよつ、おま。何言つてんの」

白仲は今までの苦労がついに報われたと喜んだ。
それにもしても、知り合いを犠牲にすることを躊躇しないあたり、ゴミみたいな男である。

思えば、基本的に筋ばかり、所詮義勇兵です。内政官たちは戦乱を避け、南方や袁紹や曹操のところに流れ歩いて。

「ぶつちやけ、俺等は政治なんて出来なくない?」 そのことに気づくのは、大して時間がかからなかつた。

そこで、周囲の反対を押し切り今年の税収を免除。税のとり方が全く分からぬのに、この状態で税を取ると反乱の危険のリスクが高すぎる。

只今、文字を読める奴は必死こいて勉強中です。

と言つても、お金なく兵たちを養えるわけがなく、元農家は帰農させた。

一応、三姉妹の巡業を劉備の住む平原を除く、青洲中で行なつた。

あまり、派手にやると黃巾の乱の一の舞になるから魯肅はしてある。ライブの規模が小さい分、入ってくるお金が少なくなつたのは言つまでもない。

そこで、

「すみません、お金を貸してください魯肅様」

「帰すあては」

「お金です。ただ今、私は借金地獄ですよ。」

と、言つても帰す当てはあつた。靈帝の具合が悪いところは十常侍からの連絡でわかつていて、

オレの知る歴史とタイムスケジュールが微妙に違うが、靈帝が死ぬ以上、董卓の権力保有がなかつたとしても中央で何らかの政治混乱が起きるはず。

最悪戦争、ソレも大規模な。

靈帝の病状をリアルタイムで知ることができるのは自分たちなら、戦争が起きる前に借金で買いためていた食料や武具を売れる。物価上昇の割合を考えるとかなりの儲けになるはず。魯肅にそのことを伝えると

「ふむ、ならば、私も稼がしてもうつか

と、快くお金を貸してくれた。ちなみに担保はオレ自身、ミスつた奴隸生活まっしぐらです。

予定通り反董卓連合はできたからいいけどね。

「こ'ひこ'や、白仲さん。反董卓連合に参加しないのか？」

「一刀、俺達に参加できる財力と兵力があるとでも」

「だよな。食料を安値で売ったことと、参加を見逃してもうしか無いな。

黄巾の乱で民の疲労が大きく、戦に迎える状況ではないとか、書状に書いとこ'うかな」

ひとまず、反董卓連合には動かず。

一年ほど待つて、税金を手に入れて魯肅の借金を返して、その後に何処かの群雄に降伏する。コレが基本方針だ。

「そういえば税収に関してですが

こんな無茶苦茶単純にして良いでしょうか、税制度や他の制度も」

「一応、漢の法体系を削つて作つてているから、革新的な面はないよ。文官の仕事の引継ぎは十分に可能だ。君の考えた警察制度は入れておいたけどあと、十常侍が味方だから政府から文句を言われることはない。いいね、腐敗した政治つて」

「よくないだろ、普通」

少し困った顔をして、一刀はやれやれと肩をすくめる。

黄巾の乱での十常侍の判断（と言うより、魯肅の入れ知恵）は、的を得ており異民族の反乱を先んじて撃破して國土の安定をたもった。さらに、彼らの推挙した張三姉妹の活躍は眼を見張るものであり、

皇帝の信任と政治家としての実績を積んだのは当然とも言える。

現状、十常侍にとつて自分たちは懷刀のような存在であり、裏では色々と優遇されている。

「それにさあ、そもそも文官少ない状況で、こんな複雑な政治が出来るか。

できないよなあ、仮に一刀お前ができるとしても、だ。オレができるない。オレにはそんな才能無い！……

「働きたくないでござる、絶対に働きたくないでござる……」

やつらつて泣き言を言つ口仲、一刀はその姿を見てため息を吐く。

「結局、虎牢関のまもりを突破することが出来なかつたようね

「も、申し訳ありません。華琳様。私の力が至らぬばかりに

「いえ、謝ることはないわ、春蘭。

私たちに利する戦いでは無かつたし、天下に曹操軍の勇猛さを記すという最初の目標は達成できた、

加えて、優秀な将を捕縛することができた。これだけあれば結果としては十分すぎるほどよ。

それに、勝てずに麗羽が顔を真赤にして怒り狂う姿も見れた

反董卓連合、曹操軍の陣地。

兵たちが間者を警戒し、見張っている、鼠一匹入ることもかなわぬ。夏侯惇の謝罪を曹操はさも当然の結果であると平然と返し、くすりと意地悪く笑つた。

麗羽が袁術にバカにされているところを思い出すと、今でも吹き出してしまいそうになる

曹操は天才だ。

一部の例外を除き、自他ともにそのことを認める人間。欠陥と言つならば、体躯が小柄なことだけであつて。彼女が現状を見てどう思つたか、もし、この腐敗した世界をどうすれば改善できるか考えるか。

『漢王朝はすでに寿命、新たなる英雄が新しい王朝を開くのが最善

それが彼女の出した答え、そして、才と言ひ基準で考えるなりに見合う人間は自分だ。

いつしか彼女はこの時代に自分のような天才が生まれたことを、天命であると考えるようになった。

霸者は自分にこそふさわしい、天命に選ばれているのだから。

「とは言え、虎牢関を落とすことが出来なかつたは失態という以外

にありません。おそらく、あの張三姉妹の影響が大きいと思われます。

群雄たちはかの勢力を恐れ、兵たちを十分に出すことは出来なかつた、ソレさえ無ければ違う結果になつたでしょう

夏侯淵が表情を変えることなく意見を言つた。

しかし、武人である彼女にとつて今の状況は決して嬉しいことではない、桂花を始めとした将や軍師を残して戦い、全力を出せずに敗北するのは恥ずべきだ。

「フフ、悔しいのはわかるけど一人共、次の機会があるわ。そう、足手まといが居ない全力で戦う機会が。

その時こそ天下に我軍の力を存分に見せよ。董卓軍に。

そして、あの忌々しい張三姉妹相手に

「「はつ」」

自らの王たる曹操に夏侯姉妹は頭を垂れる。

忌々しい彼の者らを戦いで打ち倒すことを心に誓つて。

その数日後、自らの領地に撤退をした曹操は、すぐさま領地拡大に着手する。

わずか一郡を收めるに足らぬ弱小勢力であつた曹操軍は、靈光のような速さで一州を支配しかねない大勢力へと変貌する。

「残飯ウメエ！……」

ぼりぼりと音を立てながら、ゴミ箱の残飯を漁る、白仲。ここ城の食堂のゴミ捨て場、誰が見ても食。見事に彼の容姿とマッチしている。

借金苦や財政難と共に、二姉妹に恨まれているせいと給料が低いのだ。
いざとなつたら、逃げるためのお金を確保するには食費をはじめとしたあらゆる生活費を削るしかない。

それにしても、今日はあたりの日だった。

三姉妹が食堂でご飯を食べたため、いつもよりも残飯が2ランクほどおいしい。

生きるために、ご飯や人肉でも食いますが、おいしい料理というのは心をいやし、健康を保つもの。

食道楽におぼれ、大金を失う貴族たちがいるのもわかる。

作られて時間のたつていらない新鮮な焼き魚の食べられなかつた頭をぼりぼりと齧る。

「……何やつてこるの、白仲さん

「ん、一刀じゃないか。お前も飯か」

お膳を持つた一刀が冷たい目線で、残飯漁る白仲を見つめている。

「ええ、天和たちの食べきれなかつた食事の残りだけど。

食堂のおばちゃんに乞食が残飯を漁つてゐるか確認して欲しいつて」

「おーおい、金がなかつたおまえも乞食だつただろう、気にする」とはないうれ

一刀は少し考へこむと納得した面持ちで頷き、『そつだな』と口を開き、白仲の隣でご飯を食べ始めた。

白仲に『自分のごはんを食べるか?』なんてことば言わない。いう必要もない。

奇妙に思えるかもしだれないが、それが自分たちの間の信頼であるし、乞食として生きてきた間に培つた自分自身のプライドである。

「ふふふ、まんぶくつてね。

そういうや、一刀はどうするんだ。何処かの群雄に投降した後

「そつていえば、警戒しないですか。自分たちの組織

「まさか、所詮は乞食や盜賊とアイドルの塊、気にする奴らなんているのか?

警戒するなんて想像力がちょっとお粗末としか言えないよ

「やつだよな、三姉妹のアイドルグループのマネージャーの続きかな。

きっと群雄たちは彼女達を利用するから、政争に巻き込まれて死なないようにしないと。次こそは間違いを起こさないよう」「たゞよい

持った湯のみを力強く握る一刀、その手はすでに数多の戦で剣を振るつたせいで傷だらけだった。

すでに、この世界に降り立つた時と描一本すら違いが顕著に現れている。

「守る、ねえ。赤の他人を守るなんて理解できんわ」

「いや、か弱い女の子を守るのとするのは普通だぞ」

恥ずかしそうに苦笑いをする一刀。

この世界に降り立つてから、一刀の中では決して変わらないものもあつた。

「つて、アレか。お前らエッチな関係とか。

……つて言つて虚しくなつてきたな。だいたい今の政治体型で三姉妹と交際する危険性はおまえも知つていいことだし。

アニキやファン達に知られるとミンチになりかねないことをやるわけ無いよな

「……」

「え、なにそれ、怖い。

何でKONOCHIN♪黙るの

「イツ、まさか。本当に三姉妹のうちの誰かと（放送禁止です）なことを。

もしそんなことがファンたちに知れたら、ナイスなポートで先決の

結末に直行してしまうぞ

「は、は、田仲さん。あなたじゃ、どうせ、どうするつま」

「もういい、もういいんだ、一刀。この質問はなかったことにするよ
ああつと、如何するかだけ、三姉妹に恨まれて いるオレが同じ陣
営に入れそうもないしなあ。

「オレ、やつていけるかな」

「オレは魯肅に助けてもらひ」

「アーティスト」

？水闘を速攻で落とした袁術軍、最も主力は孫策の率いる軍であつたが。

簡単に風景に風空間の簡単な構成を示す。 強調を抜絞りたて電話室に在りに上回るものであつた。

そんな袁術軍に対し、袁紹が虎牢関を落とすことができないのを

見て、袁術はひたすらに満足であった。

袁術の上機嫌は孫策軍に利益をもたらした。

暗い部屋で一人の人間が密談をしていた、お酒を機嫌よくすすつている一人は孫策。もう一人のメガネをかけた知的な印象な女性は親友の周瑜。

一人共褐色の肌をした、長身でスタイルのいい美人である。

「ずいぶんと上機嫌みたいね。

孫家に対する監視をよわめてくれるようよ

孫策が機嫌良く空になつた器にお酒を注ぐ。

孫堅が指揮する一大軍閥であつたが、彼女自身が戦いで流矢を受けて死んでしまう。

長女である孫策が家督を相続するはずだつたが、権力を持つ袁家が干渉、彼女の若さを理由に孫家の軍兵を奪つてしまう。

孫策の妹たちは人質として扱われ、袁術軍の走狗として扱われる日々。

だが、彼女たちは飼いならせる狗ではない、喉笛を噛み千切る獰猛な虎だ。

虎視眈々と独立の機会を探つていた。

「あまり油断するのは良くないわ、雪蓮。

今は反乱成功のため慎重に仲間を増やすべきよ

「そうね、冥琳。そういえば魯肅つて子。仲間に加えられそう

「彼女曰く『陸遜も君もいる、非才である自分は要らない』って話をしているし」

嘘っぽく微笑む、魯肅の顔を思い出した。

何処からどう見ても、自分が負けるとは思っていない人間の顔だつた、

「でも、孫家を裏で援助していることは、脈はあるつてことはね」

「それ以上に青州の人間に好意的らしいけど」

魯肅が徐州北部にいつて何者かと会談しているのは、自軍の斥候の手で分かっている。

人手が足りない現状、彼女を魯肅ばかり調査させるわけには行かないでの、誰が彼女と連絡を取り合っているかは謎だ。

「恋敵参上……かしら」

「そついえば、『愛しの君はヤル気がない』と酒の席でふざけたことを行っていたかしら。

私たちは対抗馬、本命は他にいるつてことでしょう」

その言葉を聞き不敵に笑う孫策。

「まあ、いいわ」

「あら、いいの」

「ええ、愛しの君を殺せば済む話でしょ」
「すごいふんと苛烈な略奪愛ね」

第三話・やつらまた

董卓軍は運が良かつた。

1つは涼州に向かい五湖と戦つたこと、自軍の戦術や手の内を他の群雄に悟られることがなかつた。

また、彼の地の有力者、馬家とも懇意になることができた。地理的にも涼州は、洛陽や長安のある司隸の後方を抑えている。

反董卓連合が結成されたとき、すぐさま馬家に手紙を送り、味方にすることができた。

2つは張三姉妹の存在である。

彼らの動きを警戒して、群雄たちは多くの兵力を出すことが出来なかつた。

「とは言え、張遼が捕縛されたというのは痛いわ」

早朝、洛陽の王宮

その一室、メガネをかけた神経質そうな少女・賈？が疲れた口調で呟いた

劉備3姉妹の活躍で呂布が抑えられている間に、曹操軍が張遼を網にかけ捕縛してしまつた。

その知らせに、董卓軍一同は涙を流して悲しんでいたが、しばらくして張遼から

『元氣やから気にせんといってなあ、

ぶつちやけ、ウチ恋ちんたちと本氣でやり会いたかったし、ここの大空気が気に入つたんで曹操軍に入ることにするわ
ま、恨まんといて、これも戦の定めや』

と書かれた、手紙が届いた。

その内容に、ブチ切れた賈？が、奇声を発しながら手紙をバラバラに引き裂いたのは記憶に新しい。

今思えば、曹操軍に寝返らざるえない状況だった張遼が、自分たちの心配を紛らわせるために書いたことだつたかもしれない。

「あ、用、おはよう」

「うん、おはよう、詠ちゃん」

執務室の中に儚い印象を与える可愛らしい少女が入ってきた。

彼女は董卓、袁紹が自身の権力集中のために嘘八百の悪評を流された少女である。

この姿を見ても、王都洛陽で暴政を働く群雄と言われても誰一人信じないだろう。

「并州の動きはどうなつたの」

「『めん、やつぱり救援が間に合わなかつた、冀州の袁紹が并州に攻めこむのを止めることができなかつた』

反董卓連合崩壊以後の袁紹の軍事行動は早すぎた。

自分たちがもともと支配していた空っぽの并州に攻め込んだ。動きが早いということは、逆に言えば、補給や兵力補充が完璧ではないということだ。

食料を十分に得られることが出来なかつた質の悪い兵たちが、かつて自分たちが治めていた土地で略奪を繰り返しているのは言つまでもない。

「だ、大丈夫よ。

食料と武器を確保できたら必ず、并州は取り返してやるんだから」

心配そうに俯いている董卓に向かい胸を叩いた。

そうだ。今、司隸と涼州を抑えているのに等しい。戦いの準備が終わればば袁紹とて擊破はできる。

つぎは、どうやって時間を稼ぐか、だけだ。

「へーイー！みんな、白仲だお。

今日はオレとアーチキ達の出会いについて教えてよつが……って聞きたくないか野郎との出会いなんて。

えーと、なんで、そんな話をしようかと思つたかといひとさ

「死んだ、ね。

そーするとオレがこの軍にいる必要もないわけだ」

白仲は冗談の話を思い出してつぶやいた。

最悪だ、状況は。攻めてこようとする袁紹軍に降伏するための使者にアーチキたちが選ばれることになつた。

張軍の中では組織の中で上位に位置するし、人選としては間違つていいない。なんだかんだ言つて、礼儀作法も影でこつそり練習していだし、オレが行くよりはマシだつただろう。

当初の予定では、曹操軍に降伏する予定だつたのだが、袁術や劉備

と戦つているので「チラ」を気にする時間はない。
自分にとつて全てがうまくいくわけではないのだ。

そんな中、ボロボロの姿をした一刀が部屋に入ってきて、ぐつたりと倒れこむ。

「おや、生きているとは意外だ」

「……どうやら、公孫賛軍が動いたって話だ。

黃河流域はずいぶんと食い荒らされている、クソつ、オレにもつと力があれば」

話は単純だ。

降伏拒否、アーチキたちは殺され、領土内に進行される。

反董卓連合、并州の戦いを終えた袁紹軍には兵の疲労や、食料の問題から考えてまだ攻め入らない。時間を稼ぐはずつて思つたが見事に外れることになる。

あと、劉備が平原から徐州の州牧に呼ばれたというのが痛い、張軍の本拠地までフリーパスだ。

せめて、あと少し時間があれば。黄河を軸とした防衛戦が行えたが

「一刀、大丈夫」

一刀に続くように現れた三姉妹が彼の体を気遣う。

寝るまもなく住民を避難させ、死ぬ気で防衛線を構築していた一刀は顔を青くしている。

「まー、大丈夫じゃない。死んでないし」

ツンツンと足先で一刀を突付く白仲に、平手打ちが走る。殴つたのはいつも破天荒な姉たちの抑え役になるな人和だ、眼鏡の奥ノ瞳に涙を貯めて睨みつけている。

「あ、あなたつて人は」

「おいおい、いきなり何すんだよ。マジで痛いっす」

「自分の義兄たちが死んだんですよ、なにか言ひことは」

そう言われて、白仲は考えこむと

「そりゃあ、人はいつか死ぬでしょ」

と、何を言つてゐるんだ?「コイツと、見下した視線で答えた。その発言に激昂した人和はもう一発叩こうと手を振り上げる。しかし、その手は

「なんで止めるの、ちー姉さん」

姉である地和によつて止められていた。

「なんで?つて、あなたは役満シスターーズにおいての軍師格よ。どんなに嫌でもコイツとは仲良くなつていかなきやならないの……だから、ね」

「へブ」

「コイツはアタシがぶん殴る……」

白仲の顔面に拳が叩き込まれる、虚弱な彼の鼻の骨がオレ、鼻血が吹き出す。

「もうこいつちよ」

更にバランスを崩して倒れこんだ彼に膝を叩きこむ。とどめを刺そつとかかとで頭を踏み抜こうとする地和

「や！」までよ、やめなさい。二人とも」

その声は、長女である天和のものだった。

その一括に二人の動きは止まる。

「衛兵さん、一刀さんとこの脣さんを部屋まで運んで治療を施しておいてください」

「う」口りといつもと変わらない笑顔をする天和、最も目は笑っていない。

衛兵もそのなんとも言えない迫力に、気圧されしてしまつ。

そして、衛兵に運ばれる白仲だが、笑っていた。
何が嬉しいのか分からぬが、口元が醜く歪んでいた。

一方、青州を離れた袁紹は公孫贊の治める幽州に向かった。
しかし、戦においては公孫贊の騎馬戦術を前に翻弄されるばかりで
あつた。

数で上回つてゐるのに決して有効な戦いができるいない、その様子
を見つめ、金銀で飾られたゴージャスな鎧をした少女、袁紹は明ら
かに狼狽していた。

「ど、どうして公孫贊」とき相手に苦戦しているの

「そりやあ、姫。先の戦いからずっと連戦続きで疲れているからじ
やないのか」

頭がちよつと足りない文醜に正論を言われて、黙りこむ袁紹。
反董卓連合の失態の怒りを戦争にぶつけていたが、さすがにこの段
階になると冷静になつてくる。

そして、怒りが治まつてくると、怒りのせいで忘れていた疲労も再
び蘇つてくる。

「うそ、ぶんちやんの言つとおり。一度休んで、次の戦いこそ全力
で行つべき」

文醜の意見に賛同する顔良。

猛将と言われているが、おとなしい性格をした少女で頭も周り冷静
な判断ができる。

自分自身の連戦の疲労と、一人の仲のいい幹部の発言もあつたのだ

るつ。袁紹は大きく息を吸い。

「オーホホホ、公孫贊さん。あなたの命はしばらく預けておきまし
てよ。

みなさん、コレは負けではござりません、優雅に撤退しましてよ」

そう言って高笑いをしながら撤退する袁紹。

公孫贊軍の兵の少なさもあって追撃こそされなかつたものの、兵たちの足取りは重かつた。

「何書いているんだ、白仲さん」

「手紙、おー、ワターシ、袁紹さん、サイコー、ゴージャス、マジ
ビッチで裏切れますつてな感じの文。それと、もう一通。
それより、軍の編成は終わつたー」

鼻に大きな詰め物をしている白仲が急そつと口を開く。
いつもの通りのボロボロの格好、そんな容姿、しかし、何故か一刀
にはそれが何時もの白仲と同じ人間には見えなかつた。

「終わつたけど、本当に上手くいくのか

「俺が軍を率いること?」

自分でも向いてないと思つたが、でもやつな人が他にいないからしかないじゃない。

小細工はちやんとするから、まあ、がんばるわ」

「いや、やつじゃなくて裏切りのことだ」

「ああそれは、もちろん大丈夫。

オレは信用されていないし、ほら、三姉妹との仲も最悪じゃないか」

鼻に詰まっていた詰め物を抜き取り、見せつける。

一刀はヤレヤレと肩を竦めた。この人は自分の価値を下げるのをなんとも思つていない人だったね。

「じゃ、まずは公孫贊。

不思議だと思わないか？公孫贊が袁紹軍に仕掛けるといつ情報が入ってきた。

それなのに何故、公孫贊が防衛戦に回っているか、つと、コレはおいておこう。問題は次はどうなるかだね」

そう言つられて一刀は考えこむ、次、自分が公孫贊だったらどう動くか。

「オレが公孫贊だったら、袁紹領に攻めこむ。騎馬隊は防衛に向かない、待ちに徹するよりも攻撃をすべきだからさ。易京城が完成していたら別だけど」

「そう、あつちも攻めこむんだよ。

あちらさんだけ。……で、許してやるつもつは毛頭ないが」

そう言って、不敵に笑う。

「まあ、こんどこそ甘い妄想を考えて失敗しないように努力するよ。ま、味方も多いし俺以上にそいつらに頑張つてもらうつもりだけど。

えつと、そして、そしてねえ

「そして？」

「…………必ず殺す」

その言葉を聞いた一刀は急に室内の気温が下がったように感じた。アニキたちが生きていれば、また、古い付き合いである魯肅がこの場にいれば、こう言つただろう。

『うわあ、完全にキレてる

逃げてばっかりの『他人を犠牲にすることに對して一片の躊躇ない正真正銘のクズ』が、他人を害するのに全力をつくす。

この事態がどれだけ危険であるかは言つまでもない。

休息に入った袁紹軍は攻勢に回った公孫贊軍に北から攻められるも、袁紹自ら指揮しそれを向かい撃つ。

領地に戻り兵力を回復させた袁紹軍は冀州という財力のある土地を最大限に利用した、装備、兵力の圧倒的な差から付け入る隙を与えない。

一方、冀州の東方・青州に本拠地のある張軍は、戦力を北部に集中させた時を狙い虎視眈々と袁紹領を狙っていた。

しかし、黄河の対岸である平原は袁紹軍が抑えている。

現在、黄河を挟んで対峙している、この状況において川が巨大な堀となっている両者攻める策はない。だが、袁紹軍には余裕があつた。

それは、寝返りの約束。

白仲が今夜、陣に火をかけるという内容だ
かの軍に対する情報は少なかつたものの、白仲と言つ将が超三姉妹
とうまくいつていなことは間違ひなかつた。

先の戦いでボロ負けしているので、恐れて降伏する、といつ考えは
理にかなつてゐる。

もつとも、罷である可能性もある。

黄河の対岸に予備兵力を残し、船を使い敵陣へと向かう。

夜の闇を前にして黄河が赤く染まつた、白仲が陣に火を放つたのだ。
それを見た、袁紹軍の将が兵を動かす。陣全体が燃え無ければコレ
ほどまでの火力はないだろう

「もう必要ないからね」

逃げるための場所をなくし、背水の陣にする意味もある。
もともと自分には人望や実績が少ないので、士気を上げるための小
細工は必要。
盛大に燃える火はこれらからの袁紹軍の行く末を表してゐるようだ
った。

「おい、次女、妖術の用意は」

「……も、もちろん出来てゐるわよ

白仲の声に、青ざめた顔で地和は一瞬ビクリと震える。
大群を殲滅する大規模な術を使う準備は出来てゐる。
触媒や発動のための資材を得るのに苦労した。魯肅に返すはずのお

金がある」と使うことになった。

この場所にさえ差し込めば、最低でも万単位の人間を消滅させることが出来る。

一方、数万の人間を皆殺しにするのだ。
それを実行する少女が恐怖を覚えないわけがない。彼女の体がガタガタ震える。

「そうか、ありがとう。

各隊、対岸に上がってきた軍を包囲する用意を、
まずは、弓矢の雨を与えようか。格場所に隠れた弓兵は矢を放つ用意を生き残りを確実に殺すために」

まず一手、岸をわたり孤立した袁紹軍の包囲殲滅。

「そり、ちゃんと大掃除を」

まあ、死ねつてことだ。

劉備軍はずいぶんカリスマに溢れた人間なんだ、と一刀は感心した
善政をしていった劉備という人望のある指導者、そして彼女が居ない
隙に領地を乗っ取った袁紹軍。

もし、平原の民が心のそこから劉備という人間を愛しているのなら、協力してくれる。

対岸が赤く染まる、あの場所では一方的な虐殺が始まっているのだ
る。

白仲は兵を率いたことは少ない、縄で縛られて黃巾党の戦いを経験
していないから当然である。

実質、ボロボロの見た目通り弱い。

この世界には、見た目からは考えられない筋力の持ち主もいるが、
そんなのと比べるまでもなく貧弱だ。人和あたりと喧嘩しても負け
るだろう。

だが、一刀にはあの男が戦いで死ぬとは思えなかつた。

そう、黃巾の乱が終わつたある日の事だ。

白仲は治安維持のため盜賊を討伐することになつた。
嫌がつたがその時は軍縮の影響で人出が足らず、仕方なく引き受け
たらしい。

幸運の女神に嫌われているのか、その盜賊は黃巾の乱の残党が集ま
つて3000人を超える大所帯になつていたのだ。

一方、白仲は100の兵。一仕事終えた一刀はそのことを聞き、兵
たちをかき集め援軍に向かつた。

そして、敵が見えたので戦おうとするといきなり盜賊たちは泣き
叫びながら降伏した。

一体どうしたんだろう? 何があつたか白仲に聞くつと向かつた先に
あつたのは

「あれ、オレの旗?」

大量に立てられた自分を示す十文字の旗だった。

「一刀。虎の威をかる大作戦は成功したぞ。盗賊だし、一刀のこと恐れているかなつて思つて、念のため用意しておいた旗が役に立つたんだ。セコイとか言わないように。少ない人数で気付かれないように敵の拠点の裏側に回つて、『はわわ、一刀の罠だ！！！』つてドラ流しながら叫んだら逃げていったよ」

「なるほど、オレが考えを読んだかのように逃げる方向に現れ、恐ろしくなつて降伏したか。でも、オレが居ないつて気づかれたら終了じゃないか」

「気づく頃には、おまえが援軍として駆けつけてているよ。他人頼りつていいね！！！」

「いや、威張らないでくれ」

他人だより、一刀はちょっと昔のことを思い出した。そして、対岸から黄河を船が渡つてくるのを確認すると、表情を一気に鋭いものに変え

「平原のみんな、俺達に力を貸してくれ！！！全軍、今こそ敵陣に火を放て」

剣を掲げ、袁紹軍の陣へ平原の民たちと共に突撃する。

一刀は超三姉妹のマネージャーとして全国各地を回つていた。ゆえに、地理、地形や人の流れ、そして、その土地の有力者はどう

なっているか詳しい。

そんな彼が平原の『劉備に心酔』している有力者を見つけるのは容易く、袁紹軍の強行軍による略奪で不満を持つ彼らを仲間にすることは容易かつた。

すなわち、平原に陣を置いている以上、袁紹軍は一刀の手の内にいるに等しい。

「次のことを考えると確実に倒しておきたいからね。
挟み撃ちにさせてもう一つ……」

数千の兵と共に煙のようになれた一刀。彼の郡であることを示す特徴的な十文字の書かれた旗が風にはためく。

北郷一刀。張軍最強の將軍。数十倍の敵兵を無傷で幾度も倒し、負けを知らぬ。

黄巾の乱における異常なまでに多すぎる功績により、孫武に匹敵する（現段階では過大評価だが）と言われる武将である。

北郷一刀と白仲黒霸の率いる軍、その兵数、およそ4000。わずかそれだけの兵で、十数万とする青州方面軍は一夜にして壊滅、いや、全滅した。

後の世で、『平原の戦い』と言われる戦い。史書には、山河には死体がならび、足の踏みどりすら無かつたと書かれている。

この戦いで平原郡を奪い、その勢いのままに袁紹の本拠地冀州へと電撃のよろに攻め込む。

攻め込まれるとは思わず無防備であつた平原郡の西に位置する清河郡を容易く奪い取つた。そして、魏郡に位置する州都『業』へ向けて進軍の構えを見せる。

本隊は公孫賛と未だに戦つてゐる、今青洲方面に救援に来よつものなら後方から追撃を受けて壊滅してしまつ。

州都陥落の危機、業を守る守備兵たちは、数万の兵を持って清河郡へ向けて足を進めた。

「はい、これで詰みつと

「白仲さんの読み通りだつたな」

清河郡の城の中でぐつたりと椅子の上に倒れ込んでゐる一人。

先の戦いからの強行軍、住民の慰撫、物資の移動などをこなしていたのだ、疲労困憊に決まつてゐる。

「オレの読みのお陰で助かつたんじゃないよ、最初から筋書きを立てた奴がいるのさ。

そいつの盤状で盛大に踊つただけだ」

「董卓軍か、本当にうまいな。

公孫贊軍が攻めてくるつていう偽りの情報を流しただけで、『こう』動かすなんて、勉強になるな」

袁紹軍と公孫贊と戦わせ、青州を助ける

度重なる戦いで疲れていた袁紹軍相手なら奇襲に近い形で襲われても、騎兵の機動力で俺達とは違い防衛はできる。

その後、襲われた公孫贊は袁紹軍へと牙を向き、青州の張軍も何らかの動きを見せる。

それを田ぐらましにして、并州に進軍。状況によつては黄河を下り魏郡を狙う。

「お手紙を渡しておいたし、魏郡陥落は確実かな」

白仲たちを狙う袁紹軍も魏郡陥落の報を聞けば撤退するだろつ。次は戦わなくていいなあ。ひとまず、危険は去つたか。

「この情勢で行けば。

よし、やつと降伏できるよ。董卓軍つていうのが怪しいけど

「董卓か。案外、いい人かもしれないぜ。
ライブのため并州の董卓の治める地に行つた時、結構な善政を敷いていたのを覚えている」

「一応、袁紹軍の尻をぶつ叩いとくか。これだけアイツらのために

尽くせば文句は言つま
二

頼んだ、一刀!! 立派にゴマをすつてくれるんだぞ、応援だけして

「あんたはヤラんのかい

「ええーつ、万が一死んだらどうすんだよ！――

おまえは死んでもいいが、オレは死にたくない！！！」

卷之三

危機が去つて、白仲さんの様子もいつも通りのものに戻ってきたし、ハッピーエンドだ。

「おで上手ごくなんて」

冀州を攻めた呂布と陳宮からの手紙を見て、策がうまく行きすぎで

賈？は呆然としていた。

ほとんど兵力の損失なく并州と冀州南部を得ることができた。袁紹

軍は公孫贊、張軍、そして董卓の手により完全に滅んだ。

「うん、張三姉妹が味方をしてくれたのが大きかったと思つ」

董卓がうれしそうに微笑む。

反董卓連合を結成され、敵だらけになつて彼女は孤独だった。味方をしたのは同じ涼州の馬騰くらいだ。その彼女ですら、表面上は味方をせず裏で援助するだけだった。

それどころか、少数の兵と娘たちを反董卓連合に入れ、どつちに転んでもいいように布石をおいておいた。

だが、張軍は味方をせずに一貫して不可解な動きをして牽制をしてくれたのだ。そんな彼女たちが今回も味方をしてくれたのだ、嬉しくないはずがない

まあ、実際は単に金がなく金策にあえいでいただけなのだが

「こつちも危機を助けたし、狩りを返したつてことなかしぃ。

それに、この手紙に書かれた臣従つて言葉」

「え、仲間にするんじゃないの。詠ちゃん」

「勿論、味方にするわよ」

不思議そうに見つめる董卓に対し、こまかすように笑う。
危険だ。確かにこつちの思惑通り「うご」いたけど、未だ味方にするべきか判断材料としては甘い。
一体どうすべきか。

「青州の自治を認めさせることにしない? 正式な州牧の位を「与えるのはどう?」

「う、うん。わかつた詠ちゃん」

そして、彼女が選んだのは放置。
もともと、領地が広がり人材が足りないんだ、臣従だけ認めて独立勢力として維持させる。

青州まで勢力を伸ばせば同時に戦線まで伸ばすことになる。そういった軍事的な意味合いもある。

それ以上に、曹操という怪物相手の餌として時間稼ぎになるだろう。
戦に負けて下手をしたら死ぬことになるけど、先の戦いで強さは折り紙つき。将の一人や二人巻き添えにしてくれるかもしれない。
いえ、先の戦いの強さを見ると死んでくれる方がありがたいかも。

「大丈夫、月は私が守るから」

賈駆の瞳に宿つた炎。

一瞬、過ぎつた暗い光。それは董卓の心に不安をもたらすには十分
だった。

「と、いわけで、州牧になつてね」

「…………（。 。 。 ）、「whyy?」

「どうしてこんなことになつてているのでしょうか。

「えー、だつてー。アイドル巡業と州牧の仕事を一緒にはできないし」

天和がにこやかに声をかける。

ビッチ仕事しやがれ、そのたわわに実つた乳は世の男性を侍らかすことには役立つんだ。オレなんかより権力を使うのには向いているだろうー！

そういうや会議場には、下の一人の妹がいないなあ。近頃、オレの顔を見るだけで逃げるようになつた。

どうせモテねーよー！顔も見たくないほど出来損ないの顔だつてかー！悪かつたな。

「そうだ一刀はどうした！

アーチキたちが死んで推薦者がいないのは確かだけど、一刀の実績は十分。オレよりか上だろう」

「えー、一刀が州牧になつたら、マネージャーとして一緒にいることができないよー。

それに今の地和ちゃんたちの状態を考えるなら、一刀の支えが必要だから」

ウッセー。

黙つて、一刀のチンコでも食つてろー！

そ、そうだ、一刀だ。一刀なら何とかしてくれる。

「州牧に推薦したのはオレだ！」

「一」、この裏切り者！そ、そんなに巨乳がいいの、バカ、バカあ

「気持ち悪い声を出すな」

一刀の右ストレートが容赦なく、白仲の顔面に突き刺さった。
何だろう、このごろ一刀のオレに対する扱いがぞんざいになつてき
ている。コレが反抗期なのだろうか。
しかし、殴られるのが時々気持ちよく。

……あぶねえ、ホモやない、ホモやないで。

女性に殴られた時のほうが気持ちよかつたから、俺はホモじゃない。
健全な男性なのだ！！

しかし、この才能（何のだよ！）。一刀、恐ろしい子。

「白仲さん先の戦いで大陸中に名前が売れたのはわかっているよな
？」

一刀の言葉に白仲は首をかしげた

先の戦いなんて、董卓と公孫賛、そんでもつて劉備が味方のような
もので、なあかつ賈駆さんがシナリオを書いたのですが。
アイツらの力を利用しただけで、俺自身は全く何もしてないんだよ。
それに一番人殺したのは次女じやん。

「少しだけオレが名を売れるように情報流したけど」

「え、なにそれ」

「俺も白仲さん名前が売れた。いい加減に戦いと役満シスターズを分けることを始めようと思うんだ。

「うひ
それを置いても 基本方針を決めたのは黄巾党の無いも 今回の
戦いもあなただ、白仲さん。指導者としてふさわしいのはあなただ

「受けるしか無いか」

一刀に言葉に仕方がないといった様子でうなずく。
ちつ、逃げるか。

今夜あたり早速荷物をまとめて、魯肅の借金があるけど。
倉庫にある袁紹軍から奪つた財宝や宝剣と今年度分の予算を合わせ
れば足りるはず、倉庫から盗み出して臧霸あたりに移動を協力して
もらつて。

「今、気づいたんだけどホンヤ、事実上、軍部と隠密支部を支配しているんだよね。

嘘ついたらどうなるか分かるよな」

「男、白仲黒霸。州牧の位、誠心誠意努めてもらいます」

白仲はこう言つしかなかつた。

なあ、みんなは『やつちまた』つて後悔するときはあるかい。
どんなに怒りに包まれた時でも、まずは一杯のお茶を飲んでから行

動をしてみるとこゝ。

『く、悔やんでも時間は元に戻らないからね。

『う、言えば、良いこともあつたよ。聞いてくれるかな？

『借金の返済が遅れることを魯肅に手紙で知らせたんだ。アーチが死んだからかな？なんと認めてくれることになつたんだ。少し変なことを書いていたけど、内容は。う、こうだ！』

『兄上のことは残念だつた。借金のことは気にしなくていいよ、まあ、それくらいの分別は私にもある。

『それに、いま、借金を返しに来たら近頃出没している虎に//ンナにされていたところだ。

『残念ながら君の書いた手紙の匂いを嗅いだだり。

『う、夜道には気をつけてね、お願ひだから』

『虎が出没しているなんて大変だな、魯肅も。』

第三話・やひもつた（後書き）

今回はちょっとシリアスに書きすぎたよつた、うん、修練が足りないな。

第四話・もづ向むかへない!!

へーイー!!みんな、白仲だお。

第一回『みんなと一緒に考えよう』のです。
今日の議題はこの状況からどうやって逃げるかだ。

名田上は州牧である俺がリーダーだ。

だが、兵士たちの大半は元ファンクラブであるため三姉妹の影響力は未だ軍事面で強い。

彼女たちの側近として活躍をしていた一刀が軍事を掌握して、黄巾以外の賊を自軍に入れ、徐々にファンクラブと軍部を分割している。

ぶつちやけ、俺はお飾りで一刀こそ青州の支配者だつて感じです、
アイツ人望あるし、オレの味方はアイツしか居ないし。

一刀が俺を見捨てたら、その時点で死ぬんだよね、現状。逃げるための仲間もお金も権力もありませんがな。

アイツには給料ガツポガツポとやつたり、女性関係の問題をもみ消したりしていい好感度を稼いでいるけど、男の好感度を上げるつて悲しくなつてくるね。

「それに州牧として内側以上に心配な面もあるんだよ」

内ゲバである。

一刀の話だが馬騰たち涼州陣営と董卓陣営との中が悪くなつていいとの話だ。

先の戦いで袁紹には計画通り潰させもらつた、公孫賛、董卓、そ

して俺たちの包囲にフルボッコにされ無様に敗北し、領地を失った。

あの戦いの最中、袁紹は死んだのか、死んでないのか。

復讐なんて虚しいもの、柄でもなくノリで行動してしまったいたし。いま思えば恥ずかしいセリフを連発して、俺らしくない行動をとつてしまつたし。

この話はここまで、もし死んでないのなら殺せるチャンスがあつた時に殺すのみ。

涼州は朝廷の傘下として董卓と共に戦う立場だ、どこで裏取引をしたか分からぬがその中は友好的といって良い。

「もつとも、それは表面上の話。

仮に董卓が皇帝になろうとしているなら、朝廷に狂信的に忠誠を誓つていると言われる馬騰さんとは殺しあつのは必然」

冀州北部を支配するまでに領土を広げた公孫賛に何のアクションもせず放置している、

てっきり兵を集めのくらいはすると思つたんだが。

うーん、やっぱりヤバくないか。

曹操が生きている限りは馬鹿な真似はしないとしても、この先、内乱が起きるじゃないか？この陣営。

それに、曹操の問題もあるしなあ。

……あれ？

までよ？今、地味に危険な状況じゃないか。

このまま行くと、曹操と敵対……。

うわああああああああああああああああああああ、勝てるわけがねえ。

董卓からの援軍が来るまで守りきらせる自信はない、一刀でも難しいだろ？。国力と将の数、その差がありますが。

「まで、待つんだ、オレ！－何か方法はあるはず、いや、ある！－！あつた、1つだけ方法が！－！」

曹操に降伏すりやええやん！－！

そんでもって、曹操の子飼いに青州を任せねばええやないか！－！

董卓陣営の内ゲバに巻き込まれずには、天下統一の候補、第一候補、曹操。

しかし、董卓陣営が今度は問題になる、裏切ったと分かつたらキレ

て真っ先に殺されかねない。

それに先に一件があるし、タダで降伏できるなんて甘い考えをするのはまずい、常に最悪の事態を想定して動かないと。

「逃げるにしても降伏するにしても時間が必要か」

少なくとも、曹操と敵対している劉備がもうちょっと頑張ってくれないと困る。
現状ではいい手が思いつかない、魯肅にでも相談の手紙でも書こうか。

州牧の執務室、年代物の机に向かい合い書状に筆を走らせる。

平原の戦いの繰り広げられた黄河より北、河北。
さて、その南の地について少しだけ補足しておこう。？州、徐州、
予州の三州で行われた戦の顛末について。

まず、？州は曹操が武力を持って平らげ、自力で州牧の位を得た。
徐州の陶謙が客人である劉備を大層気に入り、自分の寿命が長くな

いのもあり後継者として州牧の位を譲る。

もともと予州の州牧であつた袁術は荊州北部を奪い、揚州にその触手を伸ばし始める。

だが、袁紹同様に袁術は多方面に敵を作りすぎた。初めに徐州の州牧になつた劉備を認めず、不服であるとして攻める。結果、關羽、張飛を始めとした優秀な将を揃える劉備軍に大敗。また、この敗北をチャンスと孫策が揚州で反乱を起こす。袁家の本拠地である予州には曹操が攻めいつた。

勢力を伸ばしつつあつた荊州北部も、コレを機と見た董卓軍に奪われる。

姉妹仲良く似たような滅亡ルートであつた。

?州、予州の2州を手に入れた曹操は徐州を狙い兵を進めた。徐州はもともと交通の便のいい土地であり遮るもののが少なく。さらに、北部には臧霸と呼ばれる大盜賊がいて自信の権力行使ができるない。

曹操の進軍に為す術もなく破れしていく、劉備軍の關羽が殿となつて捕らわれる自体が起きるなど勝負は決したかと思われた。だが、ここに来て?州にて反乱が起こる。その反乱の主とは親友である張?であつた。

「そ、そんな

さすがの曹操もこの事態には狼狽をした。

このまま引くべきか、進むべきか、一瞬迷つた。

しかし、すぐに霸王の仮面をかぶり直すと劉備に容赦無く攻勢を加

える。おそらくコレは劉備軍の策略として引く訳にはいかない。史実とは違い袁術軍が滅んでいること。董卓軍の動きが鈍いこと、青州の張軍、いや、白仲軍が得た領土の慰撫に専念していることなど、

曹操にとってこの機に自身を攻めこむ勢力がないのが幸いしていた。心に余裕があつたのだ。

追撃を食らつた劉備は南の揚州を経て、南西の荊州方面に逃げたといつ。

だが、それを追う余裕はない。すぐさま、?州に向かわねばならなかつた。

「いいよ、曹操と戦つても

「え、ほ、本当ですか」

ボロ布のような服を見にまといところどころ怪我だらけの少女が白仲の頭を地面に擦りつけていた。

凛々しい容貌はその汚れた衣服を着ていても陰りを見せず、ある種のカリスマ性すら覗かせていた。その少女は張？の妹、張超の配下である臧霸。

曹操に攻められる主君とその姉を助けるための援軍の依頼のためにここまで来た。

董卓軍に送つた使者は門前払いをされた。

そこで援軍を送る可能性は低いものの、一か八か意を決して包囲網を潜りぬけ、青州までたどり着いた。

友の兵たちはすでになく自分一人になってしまった。

「おーい、そこ」の武士、一刀を呼んでくれ。それと医者もね」

白仲は周囲の兵に声をかけ、鋭い目線で空を見つめる。まだ、曹操と事を構えるのは早いとの判断だろ。この対応、防衛

「詰み」の一歩手前、と言つても、ただで降伏できるかは微妙、戦わず降伏したら董卓と全面的に敵対。一刀達を目くらましにして逃げることも難しそうだ

ならば、いひちから仕掛ける。

でも、やらなきや詰みになるね。
くそつたれ、やりやいいんだろ。やつたらやないか！－大和魂見せ

たるわ！！

曹操がなんぼのもんじゃい。チャカ持つてこい、チャカ。畜生、この時代に拳銃なんてないじゃないか、くそったれ。作れる技術も金もないよ。小説のようにつまへいかねえな、本当に。

「あとさ、言いたいことがあるんだ」

「はい、何ですか」

「曹操に勝つのはムリだ。せいぜい主君を逃がすのが精一杯だね。まず青州から？州に攻め込み隙を作る。うまくいけば董卓陣営あたりに逃げ込める、

董卓も曹操に売り渡す「恥ずかしい」真似などはしないだろ？」

白仲が軽く微笑む。

まあ、皇帝になるのを狙っているのならこのような手は使つてはならないしね。

「しかし、それでは貴公はいかがなされるのです」

「ん？ 降伏するわ、勝ちさえすれば講話できる条件はある

魯肅に教えてもらつた降伏内容、外交の妙。

書かれている内容が危険だつたのだろう、書状は盜賊や臧霸経由で送られてきた。後は戦術と戦いを始めるタイミングが重要。

「まあ、失敗しないよつに頑張るよ」

と、嘆いてもどうしようもない状況を説明しました。
青州の隣にある呉州の斉北郡を奪えましたが、どうやら何らかの動

うわああああああああああああああああああああああああああああああん。

ミスつたア あああああああああああああああああああああ。

きバレていたようです。

今いる自分の城の周りを兵たちに囲まれ絶賛包囲中であります。ちなみに、一刀のいる本隊は別の城を攻めるために向かっています。

一刀を少数の兵で足止めして俺狙いでどうか。

ほら外を見てください敵の数、軽く万はいるでしょう。

戦いの連續、新領土の統治への割り当て、更に反乱で動かせる兵たちは少ないはずなのに城の中にいる兵のザット5倍ですね。エライ人が書いた本には防衛なら三倍以上の兵力で互角と書いてあつた。つかえねえジジイの本だ。

そして、曹操の旗が翻っています、そうそう本人が来たといふことは俺を狙つつもりでしょう、

地形的に俺さえ討てば一刀は孤立するので帰順させるのはたやすいとの判断かな？

一刀、その位置をかわってくれ。なんでアイツだけ運がいいんだ。もーげーろ。もーげろー！

なんか虚しくなってきたよ。

「いづなりや、根性勝負しかありません。

敵とて、度重なる戦で疲れているでしょう。相手が根をあげ一刀殿が来るまで待つしか無いでしょう」「う

と、やる気満々の臧洪に戦争の士気は任せているけど。その程度の手が通じるほど曹操は甘い相手じゃない。袁紹相手でも失敗したんだ。

さてと、死にたくないが良い手段が思いつかない、こういう時にはどうすればいいか。

そうだ、寝るぞ!!

考えても仕方ない、動きがあつてから考えればいいか。

判断できる情報が無いのに、あれこれ考えて体力消費する方が死亡確率は高くなりそう。決して現実逃避じゃないよ、現実逃避じゃ。

「よーし、寝るぞーっ。きつちり体力回復だ」

周囲の兵に「休む」とだけ声をかけ、毛布をかぶつた。

ドラが喧しく鳴らされ、城には火矢を始めとした武器が大量に叩きこまれ、目が血走った敵兵たちに城が囲まれているにもかかわらず。白仲は気持ちよさそうに眠った。

「おはよー、いま朝」

「おはよりじやありません、それにもつ夜であります」

臧洪は敵兵に囲まれながら、すーすーと深い眠りに付いていた白仲を起こす。

「一刀殿から密使が来たんです、おそらく夜の闇に紛れてきたのでしょうか。

足止めの兵を撃破して、敵陣を突破した3日ほど待てば準備をして援軍に迎えるだらうと」

臧洪は窓の外から空を覗き込む、月は雲に隠れ、星ひとつない。真つ暗闇。

天候が味方したのだろう、曹操に気付かれないように密使が来れた。いや、このまま行けば外の一刀と挟み撃ちにして、曹操を撃退できるかもしれない。

「さ、さすが一刀……？」

そこまで言つて、白仲は口を閉ざす。

いや、また。本当にそんなに都合よく行くのか、今までの俺の人生的に考えて、絶対に罠が隠されているに決まっている。天運？運がいい？なにそれ

「密使は本物か？何人きた？援軍の情報は誰かに『伝えたか？』」
「え、本物が一人ですけど、白仲殿にしか言つておりません」

「二人、曹操の包囲を抜けて一人。何らかの思惑があると考へるには十分な数。」

「いや、そもそも曹操が足止めを失敗したという事自体あり得るのか？ないな。
ないよー、くそつたれ、それが分からぬほどバカじやない自分の頭脳が憎らしい。」

「援軍は来ないよ、臧洪」

「え、どうしてです。援軍は来るは」

「いや、罷だ、足止めの兵はおそらくもう一つある。
このまま援軍が来るなんて士気をあげたら、三日後に兵たちが絶望しかねない」

しかし、援軍が来ないのが分かったところで、事態は好転しない。
天候が味方して密使が届くなんて……。

「いや」

白仲のいつものヤル氣のない瞳が一気に鋭いものに変わる。

「どうしたんですか、白仲どの？」

そうだ、密使が届いたと思つてこる、今なら。
うわああああああああああああ、やりたくない。でもいつなつたら、
やるしかないんだ。

ち、畜生、こうなつたら、こうなつたら。

もう何も考えない。

そうすれば、もう何も恐くない！！

ブチリ、白仲の中で理性の糸がぶちきれた。

臧洪に選別された士氣の高い兵たちが集められた、その数500。一体何が始まるのかと兵たちはお互い視線を交わらわす。その場に姿を表したのは鎧をまとった白仲、曹操軍に城を包囲されてから寝てばかりだったものだ。

兵たちは白仲に対する軽蔑と共に、こんな状況で寝られる彼への不気味さが常々あった。

その白仲が今まで生きてきた中で見たこともないような恐ろしい顔つきで現れる。まるで狂人、その体から感じる恐ろしい威圧感。青州全土を得る前に軍に入つた古参の兵ならば、袁紹との戦いの状態を思い浮かべるだろう。何万という人間を文字通り消滅させた戦い。虐殺と言つていいほど的一方的な戦い。

そして、すぐさま訂正をするだろ。」

『かの戦いですら、いまの白仲ほど危険そうに見えなかつた』と。

集められた兵たちが震えだす、白仲の隣にいる臧洪すら青い顔をする。

「貴様らに問おひ、生きたいか？」

だが、不可能だ！！

ただ亀のように現状では不可能だ。死して待つのみだといつていい。曹操は袁紹の学友であるものの、義や情を理解するものだったと思っていた。故に諸君らには内密に降伏の交渉を行なつっていた、しかしだ

嘘八百を並べる。そんな事実は一切ない

しかし、降伏の使者は受け入れられなかつた。

私の命と引き替えに貴公らの生命だけは助けて欲しいそう述べた
降伏の使者は受け入れられなかつた。そして、その命は散つた

城に逃げ込んできた。袁紹軍のように我々を一人残らず殲滅をするつもりだったのだ。

それが許されることか！ 罪のない貴公らがただ殺されるだけなど。
許されるはずもない！――

白仲が壁を殴りつける、その手からは血が溢れ出す
ちなみに、この状況で降伏すると白仲は殺される可能性は高いです
が、配下の兵たちが殺されるなんて展開にはならないでしょう。

「ならば打ち倒すのみ。袁紹軍のよひに殺しきくすのみ。」

それについて、兵たちの声が響き渡る。まるで獣のような雄叫びであつた。

夜の闇に包まれた城から聞こえる兵たちの声、溢れんばかりの士気の上がり具合。

援軍が来るとでも思つてゐるのね。

「……うまくいったわ」

大した策ではない。

しかし、敵兵に囲まれて何千本といつ矢の雨をふりされ、ドラを幾千回も鳴らしている。

もはや、まゝとうに睡眠をとれたものすら城の中には一人すら居ない、精神の疲労は限界に達しているはずだ。

追い込まれたものは、容易く田の前の希望に食い下がる。それが偽りの希望であつても。

曹操の考へは正しかつた。

無論、人間として正しくない白井には全く当てはまらない理論ではあつたが。

奇声が聞こえた。人のものとは言えない声が。

伯仲を先頭に500の兵隊が曹操軍の本陣に向かい襲いかかつた。一万を超す大群相手に決死の突撃。

このタイミングで攻勢にでる？
誰一人として予想などしていない、曹操も、そして、その配下たちも、
何故なら。

「そんな、ありえない。何を考えているの？ 暗すぎて人の姿すら確認ができない状況で攻めこむなんて、敵味方の区別が付くわけがない。同士討ちするわよ」

そう、コレは奇襲ですら無かつた。

ただの自殺志願者がお互いに殺しあいながら突撃してくる、もはや理解の範疇を超えていた。

たが理解としても理解できるはずもない
なせなら彼の絲
指揮を取るはずの白仲がそもそも、

もはや何も考えてない。

そして、それに連なる兵たちも全て死兵。

袁紹の友人であった曹操は、袁紹同様に陰仇を詰め、殺すつもりしかも、城を包囲されて逃げ場がない。

ならば、いるすしかない!
殺すしかない!!!!

もはや、殺戮に思考を固定され、頭がパー。

「か、華琳様。かの兵たちの狂気に当たれ味方同士、同士討ちを」

「くつ、分かつてゐるわ」

荀？が兵の状況を述べ駆け込んでくる

な状況 ながらと云つて どうすればいい！ そんな方法思いつかない こゝ

剣を振りかぶつて奇声を上げて襲いかかる狂人が威圧感にひるんだ
兵の洞を達成する、わらわくらわな刀筋。

曹操は愛用の武具、絶と名付けた鎌を構えた。あの程度の武勇の相手、自分なら十分に倒せ……、

「あぎやつー！」

そして、衛兵の腹の傷口に腕を突っ込むと、その内臓を曹操相手に投げつけた。

「なつ？」

曹操の視界が隠れた一瞬を狙い、夜の闇に隠れていく。奇声と共に味方の兵たちの断末魔だけが響いていた。

後の世で、斉国の戦いと言われるこの戦い。

白仲軍、死兵となり突撃した500の兵のうちに生き残れたのは150名のみ、その他の人間は全員戦死した。10人に7人は死んだ計算になる。

一方、一万の兵を率いた曹操軍はこの戦いで死んだものは2000を超え、負傷したものは3000を超えたと言われる。

被害としては白仲のほうが上だ。

しかし、一度勝てると思い攻め込んでいた曹操軍はこの損害での士気低下は激しかった。

一方、500の兵で攻め込みながら、数倍の敵兵を打ち倒した。この戦果は自軍の士気を上げるには十分だった。

籠城戦は一に援軍の存在、二に士気を何処まで保てるかが重要である。

もはや、この城は曹操の智謀を持つてしまも、攻略は不可能なほどの堅城になり果てている。

ただ、時間だけが過ぎていった。そして、ついに、一刀が動く。

千兵を指揮する関羽に抑えられ、その突撃で一刀自身が重症を追うなど戦況は芳しくなかつた。

そこで、自らを死んだと偽り油断を誘い。さらに傷だらけの体をものとせず前線で指揮して関羽軍を破つた。

戦果としては痛み分けに近い、いや、足止めに成功している関羽のほうが上だ。それでも、遅れながらも白仲の援軍として斉国へと向かつた。

兵たちの疲労、士気の低下、もはや勝つことはできない。

曹操は退却を命ずる。

部屋の中にはミイラ男のように包帯まみれの人間が寝台にならんで座っていた。

「参ったな、左腕がないというのがこんなにも不便だなんて」

「そう言つたのは一刀である。

先の戦いで関羽に襲われ何とか逃げられたものの、左腕が切り取られてしまつた。

利き腕じゃないのでコレから先も戦場に立てるとは思うが、馬に乗る訓練をしなおす必要があるかもしれない。

腕がないと聞いた、どこぞの三姉妹が半狂乱になつてしまい、それを抑えるのに病院でハッスル、といか、特殊なナースなプレイをしたのは内緒の話である。

「いや、オマエはいいやん。

妖術でつきつきりで看病されて、隣の寝台のオレも妖術で本格的な治療されるかと誰もが思つて医者がよこされず。

熱だして生死の狭間を突つ走つたんだ、なんか味覚と嗅覚と感覚がぶつ壊れて痛みを感じない場所がいくつかあるんだが。

「一か、俺が死にかけてるそばでナースプレイしていたよな」

「…………。夢だぞ ゆ・め 」

「確かにそうだよな、

はあ、童貞の妄想つて情けないなあ

そう言つて、ゴロンと寝台に寝転ぶ白仲
暗くてよく分からぬが、先の戦いでは味方に2回ほど切られたよ
うな気がする。その20倍くらい味方の兵を切り裂いたと思うが。
運良く生き残れたものの問題は此処から先なんだよ

「そりいや、臧洪は

「張?達のいる董卓領には向かわず、ここに残ると言つていました

「そつか、……まいつか。

後は一刀頑張つてくれ、ちょっとくら人質になりに行つて来なきやな
らない」

「私達に降伏したいと」

曹操が包帯にみを包んで今にも死にそうな、白仲に相対する。武官が飛ばしていた殺氣も、目の前の死にそつで情けない男を見たらいつの間にか緩んでしました

「は、はひ、まずは手土産として徐州の大盜賊、臧霸の帰順を約束しましよう」

徐州は劉備の影響力が大きく統治が難しい。また、揚州の孫策がすきを見て奪おうと狙っている土地だ。

「」で臧霸が下れば一気に支配できる。

「そして、もう一つ。

『董卓軍との同盟』さらば、それによる『正式な官位』を

「なるほどね。人員不足で董卓軍は広がった領土に置く人員がおらず四苦八苦している状況。

それに内乱の危機もある。時間が欲しいって思うのも当然」

腰に備えていた鎌を掴む。

「そして、私達もまだ董卓軍の軍事力とは正面から戦いたくないと思っている」

そして、その鎌を平伏する白仲に振り下ろす。鎌は白仲の頭すれすれの地面に突き刺さった。いや、耳たぶをちょつと切つたけど。

「ずいぶん舐めたマネをしたようだけど、今回だけは許してあげるわ。

才あるものをむやみに殺すのは、私の主義じゃないから

そう言つて、白仲を背に去つていいく。

そして白仲は周囲の衛兵に肩を掴まれ連れて行かれた。

先の約束を裏切らないための人質として何処かの部屋に軟禁されるためだらつ

うつしゃああああああああああああ、 脱出成功。 脱出成功。

生き残った上に青州からも逃れることができたぜ、 さすが、 魯肅マジパネエ。

あの凶悪な三姉妹のいる場所になんかいられるか!!

それに、政治できなる奴が居ないから、こまま行けば破綻するの
は目に見えていたしね。

うまくいっていたのは元の治安が最悪、先の青州の支配者が巫女萌
えの変態バカだったからだ。孔融とかの太守も統治下手だったし。
地味に劉備の治めていた平原とか一揆が起こりそうな状況になつた
りねえ。

倒す賊が居なくなると他の場所でも政治面での脆弱さが一気に吹き
出しそう。

一刀悪い！マジで後は頼んだ、巻き込まれて死ぬことになるけ
ど、恨まないで。ゴメンよ。

本当にごめんなさい！蓬萊（日本）出身つてことで同郷で仲良
くなれそうだったから幹部としてこき使つて悪い、うわああああ
あ。

でも、民のことになんて興味無いので、青州の民と心中なんてゴメ
ンなんだよ！

一人で死んでおくれ。

ほら美人アイドルグループのマネージャーになつて【ペー】プレ
イしたんだろ！

そこまでいい思いしたら、きっと満足して死ねるはずだ。

うん、満足。

オレは嫌だがな！！！

あれ? テジヤ・ヴ?

貴、似たようなことを言つたような気がする。ま、気のせいだよね

とにかく、ハッピーエンドだよ、みなさん。

『恋姫？ハイハイ、童貞乙』完。

「あの男は殺すべきですね。

華琳様が生かして残しておいたことが、風には全く理解できません

ん

曹操軍の軍師の一人、程？が愚痴るようにつぶやく。

いつも、変わらずのんびりする少女、そのような印象がある。

「それは早急すぎです」

軍師の一人であり、程？の親友でもある郭嘉が彼女の言葉を遮る。だが、他の人間からは何時もと変わらない用に見える程？の様子が

おかしいのは、親友である彼女には分かつた。ビリビリわけか、焦つているのだ。

「天下の賢人を集めるとき、『今』白仲を殺すのは都合が悪い」

「むー」

「それに華琳様があの男に劣る部分が一つとドもあると」

「それは風にも分かつてます、でも」

「そう言つて下を向いて黙りこむ、程？。
うつむく彼女を郭嘉が心配そうに見つめる

「でも？」

「……グー」

「つて、寝るな！！」

程？は親友を見て思つ。

あの男は華琳様が持つていらないものを持つてゐるんですよ、稟ちゃん。

だからこそ、殺さないといけない。

「計画通りつて奴だね。

少々、危ない橋を渡つたみたいだけど」

寝間着姿の魯肅が白室の寝台の上でくすくす笑つ。

まさか裏切り者である張？を置いて、白仲を狙うなんて魯肅にすら以外だつた。てつくり張？を撃破してから彼と戦うと思つたのに。政治としては次の裏切りを無くすため、裏切り者は確実の殺してお

くべきなのに

そこで気づく。

ああ、そうか。そういうことか。

これが、曹操の配下になりたくない理由か、才能あふれるはずの曹操にだけは付きたくない理由。

「なーんだ。友人を殺したくないだけだつたんだ。

ただの女の子じゃないか」

才能溢れ完璧な霸王の仮面をかぶつているだけの。

「お友達は、曹操の限界が分かつっていたのかもね。
クスクス、まあいい。いいんだよ。彼女が強い将だつてことに変わりはないし」

董卓と同盟を結び後方安定をせ、なおかつ、徐州も臧霸を臣従させたので十分な軍事力を引き出せる。

このまま行けば、徐州にちょっと出している孫策と曹操が戦うはずだ。

そう、徐州の地理に詳しい白仲が加わって面白い事になるだらう。

「囚われのまま様氣分で待つていいよ、黒覇」

書置きが切れてしまつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1187ba/>

恋姫？ハイハイ、童貞乙

2012年1月10日23時47分発行